

## 文学博士中村元君の「初期ヴェーダーンタ哲学史」に 対する授賞審査要旨

本書はインドの哲学の正統派であるヴェーダーンタ学派の初期に於ける哲学思想の発達を論述したものであつて、第一巻「初期のヴェーダーンタ哲学」と、第二巻「ブラフマ・スートラの哲学」と、第三巻「ヴェーダーンタ哲学の発展」と、第四巻「ことばの形而上学」との四巻より成り、各巻が二編に分たれて居るから、四巻八編の大著である。

第一巻、第一編は「初期ヴェーダーンタ哲学の意義」と題せられて、ヴェーダーンタ哲学がインド思想史上最重要な意義を有し、インドの哲学の主要潮流を形成している代表的哲学であり、いわばインド人の血とともに伝わり、インドの土に密着して離れない哲学思想であることを明かにする。インドの思想は極めて複雑多岐で、西洋或はシナの思想史における互に相對立せるものもろの世界観は、それぞれの類型に於て、殆んどそのままインドの思想史において見出され得るほどであるが、その種々多様な思想の中で、インドの代表的思想はヴェーダーンタ哲学であり、その独自の思想傾向としては、既に釈尊の出現する以前にはば成立し、古ウパニシャッド聖典の中に説かれて居る。そしてその学派的伝統はその後断絶すること無く、他の哲学学派、文芸作品、また法律家、医学者、文法学者の間にも影響し、インド一般民衆の宗教であるインド教諸派の神学的基礎づけの理論を与えている。従つて「ヴェーダーンタ学派」という名称を広義に解するならば、インド教の主要な諸派も、其哲学説に関する限り、ヴェーダーンタ学派

の中に包含することもできるし、又インド教諸派との關係を離れて考えてみても、ヴェーダーンタ学派の中で最も宗教的色彩の乏しく、紀元八世紀前半に成立したシャンカラ派は、近代インドの哲学界に於ても揺ぎ無き中心的地位を保持しつつ、現代パンディットと呼ばれる伝統的な古風な学者の大部分は実にヴェーダーンタ学徒であり、特にシャンカラの系統に属するものが圧倒的に多数であつて、パンディット全体の六分の五を占めて居るといわれる。此の如き事情にあるヴェーダーンタ学派、特にシャンカラ派についての思想史的研究は従来猶未だ十分でないので、その欠点を補わんとするのが本書に於ける著者の意図である。

次に、ヴェーダーンタ学派の年代的区劃を論ずる。此学派の学説の基は聖典古ウパニシャッドに存するから、先ず其年代を研究する要がある。著者は広く先進学者の研究成果を参照して、独自の見方に基き、三期に属するもの各々の相互の年代的前後關係を検討し、結局初期のものを七種となし、これ等は約紀元前四六六―三八六年の積尊よりも以前、次の中期のものを四種となし、之を積尊以後即ち紀元前三五〇―二〇〇年頃、後期のものを二種とし之を紀元前二〇〇―紀元二〇〇年となした。更に新ウパニシャッドと称せられるもの三十九種についても重要なものに論及して居る。故に、ヴェーダーンタ学派の起原としては中期の古ウパニシャッドの時代まで遡るべく、従つて積尊並びに同時期のチャイナの開祖マハーヴィーラの時代から、紀元七〇〇―七五〇年のシャンカラに至る間の此学派及び其思想が、現実に於て、いかに發展し來つたかを明かにするのが本書の課題であるとする。シャンカラの年代も従来種々に論ぜられているが、著者はこれ等に対する批評に於て、約六種の説を検討し、何れも猶未だ決定説でないとなし、進んで、シャンカラを中心とする諸哲学者の生存年代の決定を論じ、又、シャンカラと彼以後の諸哲学者との關係を

見、かく、広く重要な学者の年代との関連から、遂にシャンカラは七〇〇—七五〇年であることを決定した。故に諸哲学者の年代決定は、シャンカラを除いて、彼以前と彼以後とに亘つて十六人に及び、之によつて本書の扱う初期ヴェーダーンタ学派は約千年の間を指すことを明かにした。更に、ヴェーダーンタの語義、特性、学派成立の事情、学派の諸名、学派の発端を詳論して居る。

第二編は「インド諸学派の見た初期ヴェーダーンタ哲学」で、(一)、仏教徒の見たヴェーダーンタ哲学の章に於ては、原始仏教、部派仏教、大乘仏教の典籍の中に此学派に闕説する所を挙げて其当時の此学派の状態を明かにせんとするが、資料としては広くシナ訳、チベット訳、梵本をも用い、従来の学者の未だ曾て研究しなかつた点を究明し、(二)、同様にチャイナ教徒の見た所を、チャイナ教の經典から引用して、明かにする。仏教とチャイナ教とは全く非正統派とせられるのであるから、此方面からの研究は重要性を有する。(三)、正統バラモンの学芸書に現われたヴェーダーンタ哲学として、叙事詩、法典、実利論、自然科学書、哲学宗教書、純文芸作品に於ける引用闕説を指摘し、一原文を示し、そして之に対するヴェーダーンタ学派側の対当文を挙げて研究し、最後に、附論とはせられるが、ギリシヤ人の伝えたヴェーダーンタ思想を原文から訳出して挙げて居る。本編に於て論述する所は著者の多大な努力によるもので、従来指摘せられなかつた資料をも縦横に駆使して論述する所、誠に精細且つ正確であるといわれ得べきもので、之によつて、当時のヴェーダーンタ学派の思想は、学派内に於て、一種秘密的に、師弟間に伝えられる慣例であつた為に、学派以外には知られる所が少なかつた状態であつたにも拘らず、此の如く相反する非正統派にすら言及せられて居る事実によつて、側面から此学派の状況を明かにせんとしたものである。實際上、此学派内では、それが

如何なる状態に於て発達しつつかあつたかを示す資料は、却つて十分には伝わつては居ないのである。

第二巻は「ブラフマ・スートラの哲学」と題せられて、第三編と第四編とを収める。第三編に於て、ブラフマ・スートラ以前の学者八人について其断片を集め、精細に研究解説してそれぞれの思想を明かにし、よつてブラフマ・スートラに至るまでの学派内の状態を示させとし、最後に同じ正統派たるミーマンサー学派との關係を論述する。

第四編は此学派の根本經典たるブラフマ・スートラの解説と思想とを述べる。ブラフマ・スートラは四編四章約五五五經より成り、もと古ウパニシャッドの中のチャンドーギヤ・ウパニシャッドに主として基き、宇宙原理としてのブラフマンを中心として、学説を組織したもので、其間に他の多くの古ウパニシャッド中の難句を解釈し、他の学派の学説を論破し、ブラフマンよりの世界の發展成立を説き、個人我の性質を論じ、輪廻の状態、最高我と個人我との關係を明し、進んでブラフマンを念想する実践生活を教え、知者の死、及び死後進む道、並びに最後の解脱を述べ、学説の全体を纏めて居るが、これ等を述べる一一の經は極めて短い句であり、文としての主語又は述語を省き、単に一語又は二語のみより成るものもある。従つて、これ等の經は師授を承けて初めて理解せられ得るものであるから、師弟口伝であり、又師の自説によつて他師とは異なる解釈も容れられ得る性質のものである。故に、古來種々に相異なる解釈も、数派に於て、それぞれ伝えられて居るし、各經の原意を知る為には、少なくとも重要な数派の解釈を比較研究せねばならぬ。従来の学者も此点に努力したが、著者も、これ等の研究成果を取入れつつ、自ら独立に解説に努め、進んで各經の意味を明かにし、全体の思想を論述し、集成した。此学派は伝説上バーダラーヤナの開いたもので、バーダラーヤナは紀元前一〇〇〇年の人、従つて、此時代にヴェーダーンタ学派が学派とし成立したことに

なるが、ブラフマ・スートラの現形を得たのは紀元四〇〇—四五〇年の間とせざるを得ないから、つまり、ブラフマ・スートラに纏められて居る重要な個々の経、並びに其思想の綱格はパーダラーヤナによつて定まり、それが学派内で師資相承によつて伝わり、其間に後世の竄入も行われ、学派内で現形になつたものであり、爾来、相伝の間に各経の解釈説明が種々になされるに至つて、それぞれ系統をなし、各々、派を形成したのである。八世紀から十八世紀に至る間に重要な派は十一も数えられるが、凡て自説によつて、ブラフマ・スートラの註釈書を作つて、それが伝えられて居る。此中で、現存のものとしてはシャンカラのものが最古である。続いては八世紀後半のパースカラ、十一世紀—十二世紀のラーマースチャ、同時代の後輩ニンバルカ、十三世紀のマドワがあるが、然し、大体はシャンカラ、パースカラ、ラーマースチャの三古註を取つて比較研究するのが穩当であるから、著者は此方針によつて一經の原意闡明に努力して居る。此研究は、他の場合と同じく、著者の着実な方法によつて行われて居て、学者をして概ね首肯せしめるに足る結果に達したといふべく、従つてブラフマ・スートラ全体の思想の叙述も最も見るべきものが存する。

第三巻は「ヴェーダーンタ哲学の發展」で、第五編、第六編を含む。第五編は「ブラフマ・スートラ以後の諸学者」でスートラからシャンカラ以前に至る間に生存した十三人について、伝えられて居る限りの資料の断片を集め、各々詳細な研究を遂げ、よつて以てスートラ以後の此学派の發達變遷を示さんとした。これ等の学者の中にはシャンカラとは學說の一致しないものが多く、又恐らくスートラの註釈を著わしたのもあろうが、シャンカラが偉大な学者であり、後世に大なる影響を及ぼす程であつたから、シャンカラに掩われて失われた所が多く、纏つた資料が伝わらない

状態となつたのであろう。従つて現今としては、此学派の發展を系統的に又組織的に示すを得ないのであるが、著者の研究によつて現今闡明し得られる限りは之を闡明し得たといひ得るであらう。

第六編「マインツークヤ頌」は、通常「マインツークヤ頌」と呼ばれるものの研究で、この書はシャンカラ以前のヴェーダーンタ学者の一人ガウダパーダ（六四〇—六九〇年頃）が、後期ウパニシャッド中のマインツークヤ・ウパニシャッドについて著わした註釈と、ガウダパーダに歸せられたヴェーダーンタ説を述べた頌とを纏めたものである。この「頌」は従来学者によつて注意せられ、英独訳もあり、研究論文も存するが、著者のここに研究した所は全部の和訳と思想の叙述とより成り、最も進歩したものであつて、而もヴェーダーンタ学派發展の一時期を明かにすることに努めて居る。ガウダパーダはシャンカラの師の師であるとせられて居るし、四章凡てが其著わした所であるとせられるから、たとえこの伝説が眞の事實を伝えたものでなく、四章が凡て同一人の筆でないにしても、此「頌」の説はシャンカラ説の先驅たるものであるので、ヴェーダーンタ学派の歴史上極めて重要な地位を有する。蓋し、ブラフマ・ストラの説は不一不異説、即ち最高我と個人我とは異でもなく一でもないとなす説が其眞意であることは、現代学者の認める所であるが、シャンカラの説は不二一元説、即ち最高我と個人我とは本来一であつて、異となすのは虚妄の見であるとなす説であるが、この不二一元説は已に他にも之を主張した学者が無いのではないにしても、カウダパーダが之を説いたことは此「頌」によつてよく知られ、而もそれが大乘仏教の中觀派、唯識派の説の影響を受け、其術語を其ままに用いる程で、一般ヴェーダーンタ学派中でも、特異な点を有する。このガウダパーダの説がシャンカラ説の中に採用せられて居る。シャンカラはガウダパーダ程には仏教の術語を用いて居ないが、一般に「仮面の仏教徒」と呼

ばれる程であり、此名称は時にはガウダパーダにも適用せられる。かかる関係にあるので、著者の此「頌」の研究は細を極めたものというべく、従来の諸研究に冠たるものである。

第四巻は「ことばの形而上学」で、第七編「文法学者バルトリハリのヴェーダーンタの哲学」と、第八編「結論」とを含む。前者に於て、バルトリハリの人物、著書、思想的地位、並びに其学的態度を述べ、進んで、形而上学を其著述に基いて述べる。前と同じく、バルトリハリもシャンカラ以前の学者であるが、一方、文法学者として古来の伝統を承け、而も長く衰微して居た文法学の研究を復興し、自説としてのスポータ説を立てて、其影響も多いが、他方ヴェーダーンタ哲学者としては、文法学に基く点もあつて、ブラフマンと語とを同一視し、其世界開展を説き、彼独得の説を主張する。而もそれは著しくガウダパーダ並びにシャンカラの説に接近若しくは相通する考を述べて居るものである。バルトリハリは元來は正統バラモンに属する人であるが、仏教との關係極めて深く、自ら仏教者となつて仏教修行をなし、再び在家者となかり、かく往復すること七遍であつたといわれて居る程であるから、仏教教理に通じて居たことは明かであり、其為に彼のヴェーダーンタ説は、其中に大乘仏教の中觀派の説、唯識派の説、特に後者の説を採用し、其術語並びに所謂仏教梵語までも使用して居る程である。かかる点はガウダパーダに於ても見られたことで、この中の重要なものがシャンカラにも伝わつたのである。バルトリハリの主要な著述は三章より成るヴァーキヤパティヤであるが、その出版は多年に亘り、漸く近頃完結したもので、学者の此書についての纏つた論述は甚だ稀であり、恐らく、ないといひ得られるであらうにも拘らず、著者は重要な部分の梵文を訳出し、以て初めて、少なくとも、ヴェーダーンタ説に關する説の詳細な論述をなしたのである。

第八編は「結論」であつて、以上の論究を結んで、(一)、ヴェーダーンタ哲学史上に於けるシャンカラの地位を論じ、従来、シャンカラはパルメニデースとカントと相並んで、人類の哲学史上の大哲学者とまで見られて居ることもあるし、インド哲学史上での最大哲学者と認められて居るが、然し、著者は、シャンカラ哲学の特徴を六項に纏め、其中に細分を設けて論じ、これ等はすべて彼以前のヴェーダーンタ哲学者の説の中に存するから、従つて彼は結局不二一元論の綜合集成者であると断ずる。故にシャンカラは独創的な思想家として偉大であつたといわんよりは、むしろ註釈学者として偉大であつたのであり、新たにヴェーダーンタ学徒だけの多数の大僧院を建て、其生活形態は仏教修行者の生活に酷似するが、学徒は諸僧院を遍歴しつつ修行し、精神的感化を受け、すべてシャンカラを尊崇するから、ヴェーダーンタ学派は、シャンカラ以後、社会的に急に有力になつた為に、シャンカラの著述のみが伝わり、他の学者の著述は遂に散逸するに至つたのであらうと論ずる。(二)、最後に、初期ヴェーダーンタ哲学の概観として、以上論述した所によつて、此学派の歴史的発展の概略を要約して七期となし、各期の特徴を述べる。

以上の著者の論述を見るに、著者は一事を論述するに、従来知られたる殆どあらゆる資料、先進学者の所論を一一検討して、其後に著者自身の論断をなすから、所論はおおむね穩健正確、論断も正確を得たものが少くないといえるし、問題によつては論述は精細を極めて居るといえる。インドの哲学は年代について極めて無関心である為に、人物、著書についても一一其年代論を要し、其点煩雑ではあるも、此手續きを経て初めて論述の材料となし得るものが多いのであるから、著者の取る態度はかかる点に於て著実であり、研究法としても最もふさわしいといえる。そして其資料は梵語、パーリ語はいうまでもなく、シナ訳、チベット訳、時にはギリシヤ語にまで及び、而もこれ等は現代



の訳書の存しないものが少くないから、著者自身の初めて解説訳出したものも多く、此点に於ける著者の努力は多大なものであり、且つ、決して単なる文献学的の研究のみ止まらず、進んで思想の理解に於ても殆んど十分な努力が払われて居る。初期ヴェーダーンタ学派の研究にはかかる二方面が欠くべからざること、著者は此両面を具えて、学界未開拓ともいうべき方面を明かにし、而も従来未だ発表せられて居ない纏まつた研究成果を公表したことは、学界に寄与すること大なりというべきである。全篇を通じて、新説及び優点は諸所に現われ、今ここに一一指摘するの煩に堪えない。